

見つめよう！自分のルーツ 深めよう！友だちへの理解 ~平和・自由とは？私たちにできることは？~		菊池 聡 横浜市立いちよう小学校
担当教科：国際教室	実践教科：総合的な学習の時間	時間数：8 時間程度
対象学年：6年生	対象人数：26名	

カリキュラム

<実践の目的>

本地域・本校には、カンボジアを始め、ベトナム、ラオス、中国などにつながる児童が多数在籍しており、『だれもが安心して豊かに生活できる学校づくり』をテーマに、教育活動を実践している。『だれもが』とは、日本人児童も外国人児童（外国籍および外国にルーツをもつ児童）を、『安心して』とは、国籍や民族の違いによって、いじめられたり差別されたりせず、自らのルーツに自信や誇りをもち、『豊かに』とは、自己肯定感をもって、思いや願いを実現していく、と捉えている。

つまり今回の実践だけでなく、本校の教育活動そのものが「違いをよさとして認め、共に仲よく生活できる」ことを前提としている。

現在、カンボジアにつながる児童は9名と少ない。中学校以降、より自分と同じルーツをもつ仲間が少なくなることで、ルーツに誇りをもつことができなったり、自己肯定感が揺らいだりする子どもでできている。そこで、少ないからといって見て見ぬふりをするのではなく、少ないからこそ見つめ、認め、共生していける児童になってほしいと願っている。

今回の実践を通して、自分・友だちの国の現状を知ると共に、外国につながる方々の思いや願いに触れ、平和や自由について考え、自分のルーツや友だちへの理解を深め、自分の将来について考えていくことをねらいとしている。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 2 3 4	体験談を聞く (ベトナム、カンボジア、中国、日本)	(1) 難民や引き揚げ者として来日した方々から話を聞く。 (2) フォトランゲージで人々が置かれた状況を話し合う。	(1) 支援者が持参した当時の写真やVTR (2) 当時、持参した荷物など
	家族や親戚にインタビューする	(1) インタビューシートをもとに、家族や親戚に当時の話を聞く。 (2) 自分の将来に込められた思いを知る。	(1) インタビューシート
5 6	スピーチ原稿を書く	(1) 家族や親戚から聞いたり、調べたことをもとに、「これからの自分の生き方」についてスピーチ原稿を書く。 (2) 自分の思いを書きことばで表現することができることばの支援をする。	(1) スピーチメモ (2) 表現パターン、表現のモデルの提示
7 8	スピーチを発表する	(1) スピーチを学級で発表し合い、感想を共有する。 (2) 原稿を修正し、校内の「国際平和スピーチコンテスト」で発表する。	

授業の詳細

1～4時限目：体験談を聞く

コーディネーターに担当者、パネリストにベトナム、カンボジア、中国、日本の支援者をお招きし、パネルディスカッション形式で行った。パネリストとは事前に打ち合わせをして、大切なことが明確に伝わるようにした。

【カンボジアにつながる地域支援者(1さん)の話】

1さんが住んでいたカンボジアは、内戦によってポル・ポト政権が一時国を支配した。もともと首都プノンペンに住んでいた1さんを含めた住民は、強制労働をさせられたり、虐殺されたりした。当時幼少の1さんは、親元から引き離され、強制労働をさせられていた。我が子の将来を心配した母親は、ランドピープルとして、命がけてタイの難民キャンプに4日間歩き通して逃げ込んだ。難民として来日したときは、すでに高校生世代だったので、学校へは入らずに仕事についた。ことばや文化がわからなくてつらい思いをただけでなく、日本の学校で学んでいないことを取り上げられて差別を受けた。結婚して子育てが一段落した今、定時制高校に進学している。

話を伺った後の質疑は、内戦当時の悲惨な経験ではなく、来日してからの努力や差別について、議論が集中した。

児童からの質問

- ・ぼくのおじいさんも内戦で虐殺されたということだけは聞きましたが、実際にどのような虐殺があったのでしょうか？
- ・タイの難民キャンプで、日本に行くと言ったとき、どういう気持ちがしましたか？
- ・1さんのお母さんは、危険を冒してまでもどうしてランドピープルになろうと思ったのですか？
- ・日本に来てから、どのような生活をしていましたか？どうして学校に行けなかったのですか？
- ・今、一番の幸せなことは何ですか？どんな時ですか？
- ・今でも、カンボジアでの悲惨な経験を思い出すことはありますか？
- ・どうして今、定時制高校に通っているのですか？卒業後は何をしますか？
- ・ご自分のお子さんにはどのように育てて欲しいと思っていますか？

(一部抜粋)

その後、自宅での取材になったが、感情的に聞くことができなかった児童と、家族や親戚から当時の様子を詳しく聞くことができた児童に分かれた。どちらにしても、当時の悲惨な状況を知るといよりは、自分の命や子への思いを中心に語り合えるような支援をし、その後のスピーチ原稿にも、「つないでくれた命を大切にしたい、私の将来の夢は・・・」のような方向で展開できるように支援した。

5～6時限目：スピーチ原稿を書く

「自分は何をすべきか」カンボジアにつながる6年男子(1年生時に来日)

僕はカンボジア人です。今までは堂々と言うことはできませんでした。僕のおじいさんは、昔カンボジアで警察官をしていましたが、内戦の被害を受けたくなかったから、日本に難民としてきたそうです。

先日、カンボジア語の通訳の先生から、内戦についての話を聞きました。先生が9才の頃、カンボジアでは内戦が続いていました。先生の家族は、「このままでは子どもの命さえも危険になる」と思って、タイまで逃げることにしたそうです。タイに行く途中、危険な目にあいながら、何日も夜通し歩いて国境に着いたそうです。しかし爆弾の音やピストルの音が今でも頭の中に残っていて、花火の音を聞くと、カンボジアでの恐ろしい経験を思い出してしまうので、今でも花火は嫌いと言っていました。

僕は、今までどうして日本に来ることになったのか考えたことはありませんでしたが、今回のことがき

かけで、家族に聞いてみました。僕の家族は、おじいさんが日本に行った後、おばあさんとカンボジアで暮らしていました。お父さんとお母さんは、僕が日本に来る2～3年前に日本に来て仕事をしていました。僕はカンボジアの学校に通っていましたが、1年生の途中でお兄さんと日本に来ました。しばらく大和のおじいさんの家に住みながら、下和田小学校に通っていました。カンボジアに住んでいるときに、お寺の人から日本語を少し教えてもらっていたので、少しは話すことはできました。友だちの言っていることは少しはわかりましたが、漢字や算数はわからなくて勉強はきらいでした。

1 先生は、日本に来て、日本語を勉強するセンターで3ヶ月間勉強した後、すぐに仕事をしたそうです。しかし仕事をしてからも、なかなか日本語を勉強するチャンスがなく、日本語もわからなかったそうです。その後、結婚され、3人のお子さんと幸せに暮らしています。1 先生は、日本に来て学校で勉強できなかったことを後悔し、時間ができた今、夜間高校に通って勉強しています。3人の子どもたちも、「お母さん、勉強がんばってね」と応援してくれるそうです。

ぼくは将来 JICA の青年海外協力隊として、困っている国に行き、困っている人たちを助けたいと思っています。1 先生は、カンボジアに残してきたおばあさんを思い、学校を卒業したら老人ホームでお年寄りのお世話をするという夢があるそうです。僕は、まだ将来の夢はわかりません。しかし、今できることは一生懸命やりたいと思っています。作文や計算、社会のルールを守ることなど、やらなくてはならないこともたくさんありますが、おじいさんやおばあさん、両親のためにもあきらめたり逃げたりしないで、ひとつひとつ乗り越えていきたいと思っています。

「2つの将来の夢」カンボジアにつながる6年男子(5年生時に来日)

ぼくのおじいさんとおばあさんは、15年前くらいに難民として日本に来ました。そのころカンボジアでは、クメール人とクメール人の戦争がありました。二人は、歩いてタイの難民キャンプまで逃げて、何年後かに日本に来たそうです。

ぼくは1年前に日本に来ました。カンボジアでは、お寺の中にある小さな学校に通っていました。とても貧しい学校で、教科書もノートも筆記用具もありませんでした。僕が5年生になるときに、日本に住むおじいさんに呼ばれて家族で日本に来ました。おじいさんに聞いてみると、ぼくの家族の幸せな生活のために、日本に呼んでくれたと言っていました。

日本に来てから、お父さんとお母さんは朝早くから夜遅くまで働いています。土曜日でも仕事をしていました。カンボジアで暮らしていた時よりも、家族で過ごす時間が少なくなったので、ぼくは「これが幸せな生活なのか」と思うようになりました。お父さんは、「お金がたまったら、カンボジアに土地を買って住もう」と言っていました。僕は日本が好きだけど、大きくなったらカンボジアに帰りたと思っています。なぜなら、カンボジアで暮らしている友達や親戚を少しでも助けたいと思っているからです。

僕は将来、カンボジアで車の仕事か洋服のデザインの仕事をしたいと思っています。そのために、今、日本語を上手に話したり、書いたり、計算したりできるようにがんばりたいと思っています。また、クメール語でも話したり、書いたりできるように、クメール語も勉強したいと思っています。そして日本語もクメール語も話せるようになって、1 先生のように、困っているクメール人を助けてあげたいと思っています。僕が日本に来て助けられたように、困っている人を助けて安心させてあげたいと思います。

成果と課題

- ・外国につながる児童はもちろん、日本人児童の心も変容させる取組になった。特に日本人児童の感想には、「小さい頃から一緒に遊んでいた友だちの家族のつらい経験を知ったり、平和や自由を求めて日本に逃げてきたという背景を知った。そんな人たちが受けた差別のようなものを無くして、どんな国の人でも仲よく助け合って生活できる日本を作っていきたい」「いちょう小学校に、外国から友だちが転校してきたら、助けてあげたい」「団地に住んでいると、日本人と外国人の問題を聞くことがあります。私には何もできないけれど、お互いに気持ちよく生活できるよ

うになってほしいと願っています」「両親の子どもに対する思いと期待を知った。私も両親の思いを胸に刻み、将来の夢を実現したい」など、自分の明日の生活に生きる取組になったようだ。

・小学校時期において、自分のルーツに向き合う学習を展開することに関しては、賛否の声が上がるであろう。中学生になると思春期を迎え、一般的に自分や家族のルーツに関する悩みが表面化するようだが、ここに受験という大きな課題が重なることによって、自分の将来像を描くことができない問題があるようだ。そこで、本校では、数年前から、6年生の戦争に絡む学習の発展学習として、この取組を実践してきた。小学校6年生のこの時期に、自分のルーツを見つめ、友だちへの理解を深めることによって、中学校期に生じる課題も仲間と助け合いながら、乗り越えることができる子が増えてきているように感じる。しかし、その前提になるのは、「違いをよさとして認め合う」目と心を養っているかである(参考資料)。したがって本校では、各学年の教科学習の中で、多文化共生を盛り込んだ学習を展開している。低学年は、友だちの国の歌を歌ったり、踊ったり、ゲームをしたり、食文化を体験したりする「多文化理解」的な取組を中心に行う。高学年は、自分の身近な環境での問題点を解決して「共生教育」的な取組を実践している。また、公的な行事や掲示物や配布物にも多文化や多言語を用い、それぞれの国の文化や言語が大切にされるような配慮をしている。その結果、国籍や容姿で、偏見や差別をすることは見られない。

支援者の方には、母国で起きた悲惨な話をしてもらうことへの負担が懸念される。今回初めて、パネルディスカッション風に行ったのは、当時の悲惨な話を中心になるのではなく、「平和と自由を求めて」をテーマに話が進むように配慮したからである。

悲惨な出来事は、平和になる前に必ず通らなければならない過程であって、日本でもあったはずである。悲惨さを強調しすぎることは、日本に住む、本地域に暮らす外国につながる人々への偏見を生むことにつながる恐れがあるので慎重に扱う必要がある。

国際教室担当教諭は、本来、日本語指導が必要な児童に対する日本語指導や教科補習、適応支援などを中心に行っているセクションのため、今回のような実践報告は困難であった。

参考資料 「多文化共生を盛り込んだ授業」

今回のこの実践も、「多文化共生を盛り込んだ授業」の一つである。本校では、各学年が、各教科・総合的な学習の時間等の中で多文化共生を盛り込んだ授業を実践している。授業の視点としては、低学年が、歌ったり踊ったり遊んだりする体験を中心に行う『多文化理解』と、日本人と外国につながる人々が互いに住みやすい環境をつくるための『共生教育』の二つの柱で実践している。

1学年 『いろいろな国の遊びで遊ぼう』(生活科)

国際理解教室の先生より教えていただいたフィリピンのじゃんけんがきっかけとなり、クラスの友だちの国のじゃんけんを調べて遊んだ。また、地域に関わる中国・ベトナムにつながる方々をお呼びし、歌や遊びを紹介していただいた。

2学年 『お話大好き、お話いっぱい、こんなお話を考えた』(国語)

外国文学に触れる国語の単元において、いろいろな国の本を取り上げた。学習支援者に母語で読み聞かせをしていただいたり、ベトナムにつながる児童にベトナム語で読んでもらったりした。また、『スーホの白い馬』の発展として、内モンゴルにつながる保護者から話を伺ったり、馬頭琴演奏者を学校に招いたりしてモンゴルの方々の文化や思いに触れる貴重な体験をした。

3学年 『みんなの国を知ろう』(総合的な学習)

運動会で取組んだ『よさこいソーラン』がきっかけとなり、クラスの友だちの国々の踊りも踊りたいという興味がふくらんだ。そこで、ベトナム、中国、フィリピンの講師をお招きし、「踊りを通して、それぞれの国の良さを知ろう」という活動を展開し、学習発表会で発表した。

4学年 『ベトナム野菜づくり』(理科・総合的な学習)

ベトナム野菜を栽培しているお宅に訪問して、野菜づくりにかける思いを取材し、ニガウリづく

りと平行してベトナム野菜づくりに取組んだ。ベトナム食材店に種を買いに行ったり、土づくり、水の管理など、多くの場面に関わっていただきながら様々な思いに触れることができた。学習のまとめとして収穫した野菜を使った『ベトナム野菜パーティー』を開催した。

5学年『世界の米料理』（総合的な学習・家庭科）『中国の切り絵づくり』（総合的な学習）

稲作の発展として、お米料理について各家庭での「お国自慢料理」について調べ発表した。授業では、日本の太巻きづくりに挑戦し、授業参観で保護者と共に試食した。

6学年『自分のルーツを見つめ直そう 友だちへの理解を深めよう』（総合的な学習・社会科）

地域に住む戦争体験者をお招きし、戦争の体験話を聞いた。また、クラスにいる外国につながる友だちの多くも戦争を背景として来日していることに着眼し、支援者や保護者に話を伺ったり、聞き取りをしながら、自分・友だちのルーツを見つめ、友だちへの理解を深め、自分の将来について考えた。

参考資料 「4校児童生徒交流会」

4校児童生徒交流会とは、多くの外国人児童生徒が在籍するという同じ課題を持った上飯田中学校区4校（小学校3校、中学校1校）において、多文化をテーマにした交流を通し、お互いの連携を図りながら、指導の連続性を図るための交流会。毎年、3回（中学校文化祭、小学校2校）、会場・運営を持ち回りで開催している。今年度は、1月28日（木）に本校で第3回を開催した（今年度は、新型インフルエンザの流行のために、第1回及び第2回とも中止になったため、本校での開催は今年度初めての取組になる）。

・趣旨

現在、カンボジアにつながる児童は本校に9名、中学校に2名と少ない。しかし、団地には子育て世代の若いカンボジアの方々が増えつつあり、近い将来、カンボジアにつながる友だちが在籍する可能性がある。また、他の2つの小学校からすれば、外国につながる友だちが少ないばかりか、カンボジアにつながる子はいないために、中学校進学後に安心して過ごすことができなくなる状況が予想される。

そんな中、いちょう小学校にカンボジアから転校生があり、カンボジアの文化を取り入れた授業を実践した。また、その児童を中心にして、友だちにカンボジアの現状を伝え、ユニセフカンボジア指定募金を行ってきた。しかし、カンボジアに関する学びや募金が一步通行だけで終わる欠点があり、児童に対して深まりは見えなかった。そこで、旧大和定住促進センターの方々が中心となって交流をしていたプノンペン市内の孤児院、CPCDO (Children Poor Community Development Organization) をターゲットにし、PCによるメールでの交流を通して、本当の意味での交流、助け合い、募金活動を展開するようになった。

今回行うカンボジアの紹介と閉会行事の中では、カンボジアの豊かな自然や文化、そして子どもたちの笑顔を紹介していくが、最後にカンボジアの人々が抱える悩み共有し、募金を呼びかけることにした。

また、いちょう小学校の多文化共生委員会の児童（日本2名、中国4名、ベトナム2名）が、友だちの国の大切な文化である「ココナッツダンス」を練習し、参加者に披露する場も設定した。

- ・日時 1月28日（木）15：00～16：00
- ・対象 4校合計 約200名程度（希望者）
- ・内容 『みんな友だち カンボジア』
- ・場所 いちょう小学校体育館及びワールドルーム
- ・進行 いちょう小学校 多文化共生委員会（5・6年生）の児童
- ・プログラム
 - カンボジアの紹介
 - カンボジア文化体験コーナー

ココナッツダンス披露（多文化共生委員会児童）
閉会行事

